正倉について

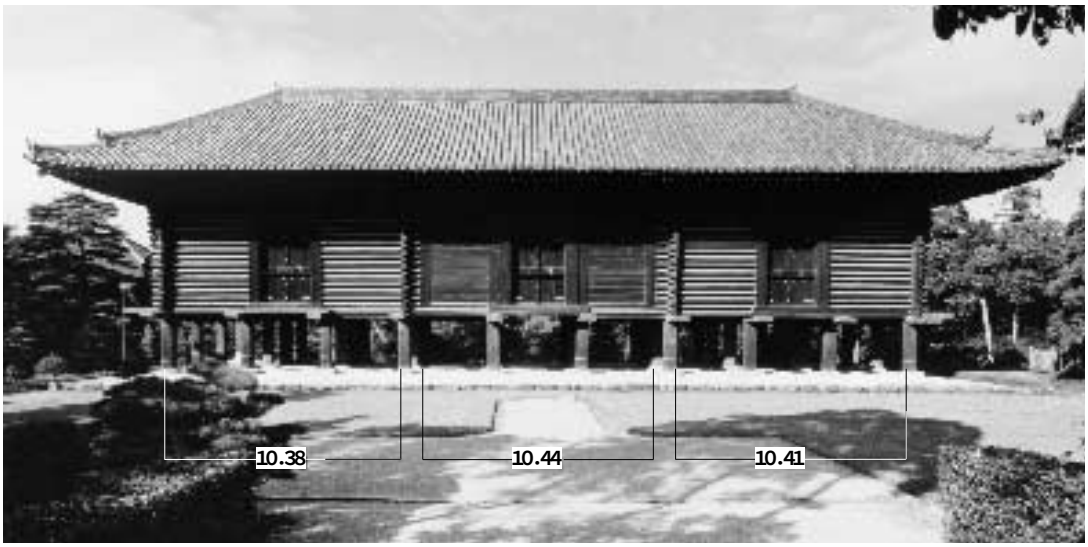
阿　部　　弘

1　創建当時の形

正倉の構造が説明される場合、その最初の形態について、二つないし三つの異なる考えのあることに触れられることがある。異なる考えとは、初め正倉は二棟の校倉であったとするいわゆる二棟説(1)及びそれに対する反論である一棟三倉説(2)などを言う。一棟三倉とはもちろん現在目にする形のことである。一棟でありながら二倉であったとする意見もある(3)。ただ目下のところ、それらの間に論争はなく、解説に当っても、その多くが異論のあったことを述べ、未決着であるとするに止まっている。

それ程解決の困難な問題なのであろうか。吟味を試みたい。ただし、それらの諸説の根拠とされるところは繰返さない。ただ二棟説にしろ一棟二倉説にしろ、中間部分を繋ぐ増築工事が、創建の何年後に行われたと考えるのか、もちろんそれを想定されてはいるのであろうが、そこには全く疑問を挟むことはないものと、不問に付されたままであるのは理解に苦しむ。宝物献納が天平勝宝８歳（756）。「中間（なかのま）」すなわち中倉が記録に現れる最初が天平宝字５年（761）。この間に改造を行ったと考えるのであろうが。

そもそも正倉がかつては双倉と記されたこと、そして形式の異なる二種の建築の結合による複合体であることから、一方の完成後，時をおいて他方を以て繋ぎ合わせ、完成させたとする二棟説が唱えられたのであった。建設過程のある段階においては、校倉二区の組立てが先行し、それを追って中間を繋ぐ工事が始められた。その段階では、何れを先行させるべきか、順序は決まっていた。次章で示す解体工事中の写真では、それとは逆の過程における同様の場面が写されている。校倉二棟をひと先ず完成させた後、何年か間をおいての改築工事を何故考える必



挿図１　正倉　正面

要があるのだろうか。並みの倉庫ではなく、宝物が納められた最重要の宝庫に手をつけるなど、これ程考え難いことはない。

それでは一棟二倉説は如何であろうか。その説の依り所とされるのは文献に見える双倉である。一つは東南院文書第４櫃第７巻の摂津国安宿王家家地倉賣買券に見える双甲倉で、次の通り記されている。

双甲倉壹宇 長五丈　双別 各長一丈七尺八寸 高一丈二尺四寸　広一丈六尺　中空間長一丈四尺四寸

そしてもう一つは、西大寺資財流記帳 堂塔房舎第二 食堂院の条に次の通り記されている。

瓦葺甲双倉 各長二丈三尺五寸 広一丈八尺四寸　中間 長二丈二尺八寸

前者には「中空間」、後者には「中間」が記され、ともに一宇の下に並立する二区の校倉に挟まれた吹き抜き部分であったと察せられる。

では、それらの吹き抜き部分に壁を取り付けさえすれば、正倉と同形式の一棟三倉に改造することが出来るのであろうか。注意を要するのはそれら中間吹き抜き部分の長さであり、どちらの双倉にあっても、それらは両側の甲倉より短い。つまり中間の方がより狭いのである。これでは正倉のような一棟三倉の建物に改造し得ないことが確実である。

その点、正倉はどのようであろうか。正倉に正面から向き合い、床下の束柱の間隔に注意すれば、中倉がその両側の北倉、南倉よりやや広いことに気がつく。事実、中倉だけが広く造られている。即ち、北倉、南倉の10.6m（実測図中、束柱心々35尺）に対して中倉は11.93m（同束柱心々39.38尺）である。

何故、中倉を広くする必要があるのか。収蔵空間をより大きくするためであろうか。否そのようなことよりも、正倉を建築として成り立たせるため、より大切な理由があった。

そこでもう一度、正面から注意すれば、中倉の板壁全体の間口――北倉と南倉の校木に接して立てられている角柱を含めての外法――が、北倉、南倉の間口（内法）と等しいのではないかということに気付くであろう。中倉のその壁面間口は言わば見掛け上の大きさに過ぎないためか、従来測定されず見過ごされて来たが、あらためて北倉、南倉の間口とあわせ――但しすべて東側宝庫外から――実測した。

その結果、北倉の間口（内法）10.41m、南倉の間口（内法）10.38m、中倉板壁間口（外法）10.44mの値を得た（挿図１）。これらは同一値の計画から出たものと考えて誤りないであろう。この建物は正面から見て、中倉も北倉、南倉と同じ大きさの倉であると受け取られなければならなかったのである。ただそれは専ら建築の形態上の問題としてのことである。

若し仮に中倉を実質上、北倉、南倉と同一規模にしていたならば、正面から見た場合、中倉は狭く見える結果になる。それでは建築の態をなさない。安宿王家や西大寺の双倉のように、中間がより狭い倉では、そこに壁を設けて一棟三倉になりはしても、正倉のように整った形の建築になるわけがない。正倉の北倉と南倉の間は、ただ一倉分と余分に若干量の容積を確保する目的のもとに計画されたのではない。そうではなく専ら正面の形を整える目的のもとに、最初の段階で決められたに違いない。

このような計画のもとに始められた工事の途中で、中倉の壁にだけは手をつけず後廻しにされたなどとは到底考えようもないことであるが、仮にそうとして、出来上がった結果はどのようであったろうか。これまた建築と呼び得るものではないであろう。芸術作品としての建築になり得るか否かの問題なのであって、それは一棟三倉の正倉と同列に扱い得るものではない。中間部を囲うのに何故板倉様式を以てしたのかという疑問が残るかも知れないが、正背両面だけを板倉風にしたに過ぎない。それは意図的に意匠に留意したこととする説明(4)にこそ耳を傾けさせられる。

正倉の立つ位置は東大寺正倉院の西北隅に近く、とくに西側は鼓阪の北の低地へ向かって直ちに下り斜面となる。正倉に向う道は主に南ないし東からに限られ、直ちに東面するこの建物と正対することになる。しかしそのような位置関係を考えるまでもなく、東大寺正倉院中の主要なるものであるこの建物は、建築としての形、この場合はとくに正面のそれを整える必要があった。

結局、正倉はもともと今日の形で建てられたということになる。それはもともと双倉でありながらの三倉であった。

註１　小杉榲邨「寧楽の宝庫」（国華85号　明治29年10月）
　　石田茂作「正倉院宝庫の双倉説と三倉説」（「正倉院の研究」上冊　昭和22年10月）
註２　竹島寛「正倉院中倉考」（「神宮皇学館史学会会報」１号　大正11年７月）
　　竹島寛「正倉院中倉考補遺」（「歴史地理」49巻２号）
　　岸熊吉「正倉院の建築に就て」（「寧楽」12号「正倉院史論」昭和４年）
　　関野貞「正倉院の校倉」（「東洋美術」特輯「正倉院の研究」昭和８年）
　　和田軍一『正倉院夜話』昭和42年（のち改題して『正倉院案内』平成８年）
註３　藤沢一夫「正倉院建築論考」（「史跡と美術」192号　昭和24年１月）
　　村田治郎「正倉院の建築」（「正倉院文化」昭和23年）
註４　福山敏男「正倉院　宝庫」（角川世界美術全集３　日本３　奈良　昭和43年）

２　今日の状況

今日の正倉がどのような建物であるか、それを理解するのに参考となる事実を、出来るだけ写真で示しつつ書き留めておきたい。

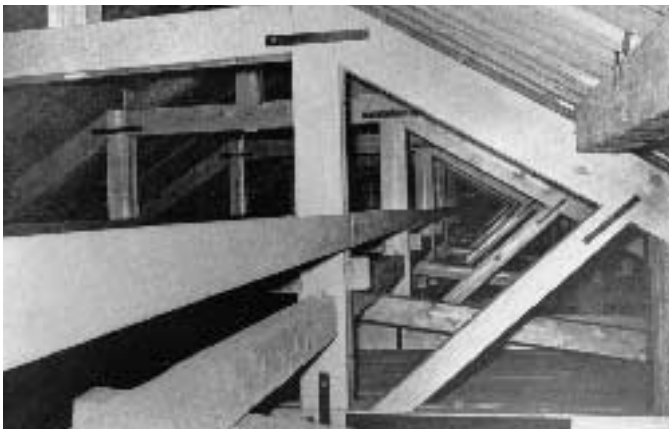
現在正倉には唐櫃を例外として置くほか、宝物は無い。すべて別棟の西、東両宝庫に移されていて、再び戻されることはない。残るのは唐櫃数十合及びガラス戸棚など、今は役目を果たし終えた調度や道具類のみである。嵩張るそれらの残留品によって空間は結構狭められてはいるが、空虚の感は否めない（挿図２）。目は自ずと周囲の壁や足下の床板、そして上方へと誘われ、否応なしに後補の木材を目にすることになる。そして階下から階上へ、更に急な梯子を伝って屋根裏に這い上れば、そこは新旧入り混じる巨材の林立、交錯する小屋組の只中である（挿図３）。外からは想像もし得ない骨組の逞しさに驚かされる。

挿図２　北倉内部　二階

かつて庫内点検の折、微かな光のもとで目に焼きついた屋根裏の様子を含め、正倉の今の状況を、幸い恰好の手引きとなる参考資料を頼りとして、書き留めておきたく思う。

手引きの一つは、大正２年３月から同年12月に至る正倉解体修理の過程を撮した写真である。まことに貴重な記録写真で、早くから種々の出版物の中でその内の数枚が正倉の説明に用いられて来た。今回も10枚程であるが、現状を理解する上で修理前後の状態を対照させるのが有効と考え、選択のうえ配列した。

もう一つの手引きは、正倉の平面図以下の実測図である。昭和７年実測の、もちろん現状を表した図面である。建築の分野に直接携わらない筆者などにもまことに有難く、教えられるところまことに大であった。



挿図３　屋根裏　北倉から南を見る

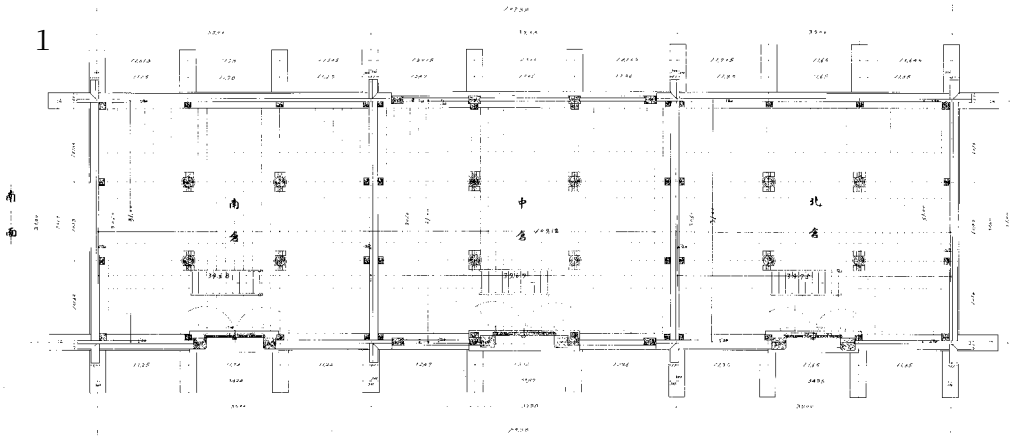
なお正倉の図面としては、大正２年解体前の実測図がある。かつて浅野清氏による論考「正倉院校倉屋根内部構造の原形について」(5)の中で紹介され、また正倉院年報第11号でも示された。

以下、解体修理中の写真を見つつ、簡単に説明を加える。但し、小屋組や軸部のもとの構造がどのようであったか、そしてそれらがどのように修理されたかなど、正倉の実態を理解し得るように配列し直した。そのため工事の順序とは異なる点、諒承願いたい。

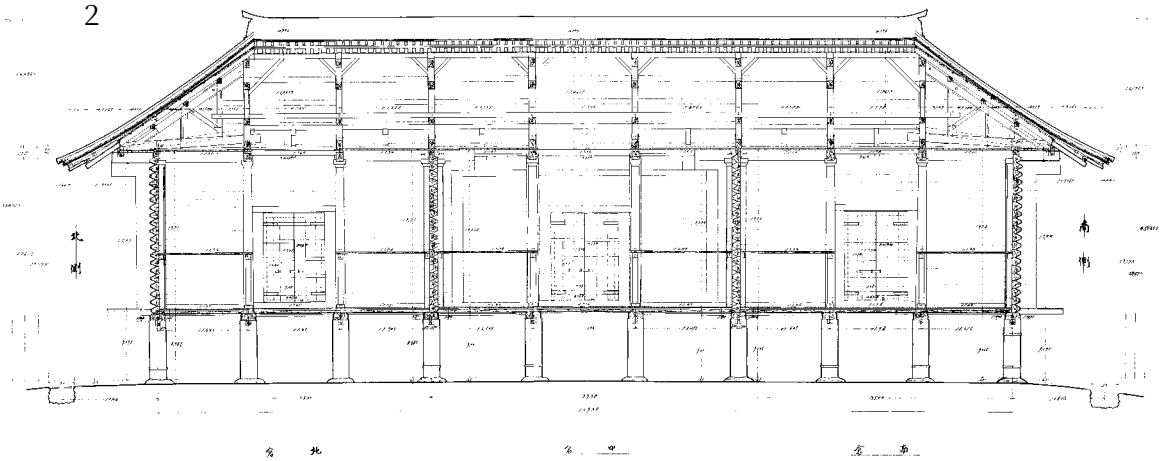
正倉 解体前　「東側及南妻全部現況」（カギ括弧内は修理現場撮影写真帖の説明、以下同じ）（挿図４）

大正２年（1913）解体前の正倉を南東側から見る。軒の垂れ下った様子が分かる。明治15年（1882）その下に支柱が立てられた。校木の壁体にまで歪みが目立つ状態にあったことが、南倉（向かって左端の部分）の南壁で分かる。20本の校木のうち最下段のものには、上からの圧力で

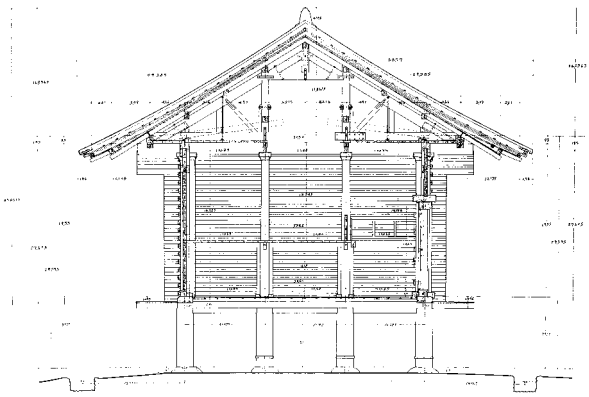
1



2



3



1．正倉一階平面図

2．正倉東側断面図

3．正倉中倉断面図

（昭和７年実測図）

挿図４　正倉　解体前

半ば転びかけた状態のものもあったことが、解体前の図面に記されている。

この時の修理に際して、床下には四方に向かって緩く勾配をつけてコンクリートを打ち、周囲に雨落下水溝が設けられた。避雷針は明治10年の設置。(6)

小屋組 北倉 解体中　「東北隅ヨリ北倉隅木小屋廻ヲ見タル現況」（挿図５）

北倉上の瓦を下ろし、野地板、木舞、垂木を外したところ。正倉のもとの屋根構造が三重梁式と呼ぶべきものであったことが浅野清氏によって説かれている。ここにその一端を垣間見ることが出来る。母屋や棟木に入れられている肘木が舟形に造られているのが分かるが、屋根裏の部材にまでそのような細工を施したのは、そこへの出入りを考えてのことかと浅野氏によって推測されている。そこもまた容量の大きい収納空間で、現に修理改造後も近時までそのように利用されて来たことと思い合せ、大変興味深いものがある。手前の校木の先端は重圧に押し潰されんばかりである。

挿図５　小屋組　北倉　解体中

小屋組 北倉 組立中　「小屋新梁架渡及合掌組立現況」　（挿図６）

緊密に組み直された同じ北倉校倉軸部に、旧梁とは少し間をあけて新梁を重ねて架け渡し、その上に西洋式の小屋が組まれたところ。これだけでも屋根構造の著しい強化ぶりが分かる。そこへさらに桔木が、とくに四隅には四本入れられた。写真はそれの入る前の段階。長く突出た校木の先端にはボルトを通し、丸桁と繋ぎ合わされた。

挿図６　小屋組　北倉　組立中

小屋組 北倉 解体中　「南倉南西隅ヨリ南倉中倉校木取解北倉小屋取解現況」　（挿図７）

前２図とは逆に、南西側から、すでに板壁の取り外しの進んでいるらしい中倉部分の向こうに北倉小屋組を望む。その小屋組は北倉と中倉の屋根裏内部での間仕切り壁を、ほぼ正面こちらに向けている。もとは屋根裏にも北倉、中倉、南倉をそれぞれ仕切る壁のあったことは、解体前の桁行断面図によって知ることが出来る。更にこの写真によって小屋束の間、扠首組の間に羽目板を入れ仕切としていたこと、そして羽目板には既に外されていたかと思われる部分のあることも見て取れる。明治の初め南倉も勅封倉となった後には、南倉を中倉から厳重に遮断する必要もなくなっていたであろう。この大正の修理を機に、間仕切り壁は総て廃されてしまった。現在正倉の屋根裏は三倉通しとなっている。残るのはもとの仕切り壁の小屋束の切断された一本だけである。それは南倉屋根裏西寄りで束に転用されている長さ１ｍ余り、一辺20㎝程の角材で、両側に幅６～７㎝の溝を埋木して使われている。もとは北、中あるいは中、南倉いずれかの屋根裏内小屋束で、厚板をはめていたものと考えられている。

挿図７　小屋組　北倉　解体中

小屋組 組立中　「東（マヽ）北隅ヨリ小屋廻リ組立現況」　（挿図８）

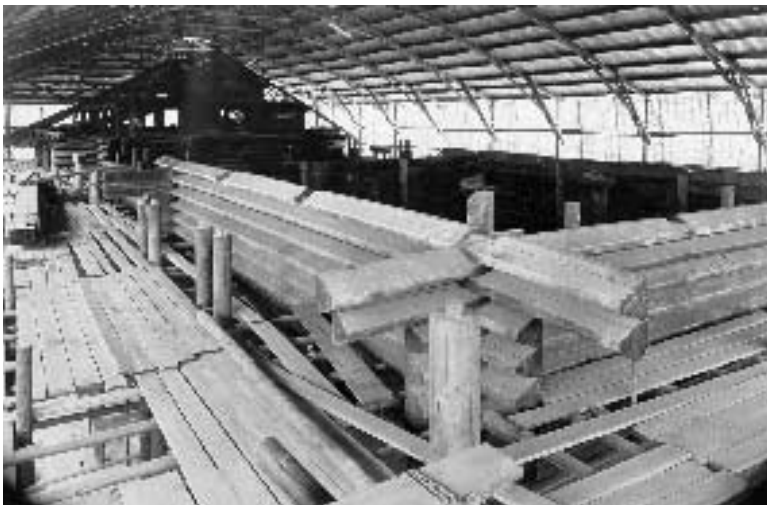
合掌、繋梁、束などに古材の充てられている様子がうかがえるが、新材が大半を占めている。屋根部分の強化が図られた実態がこの写真によってもよく分かる。

なおこの大正の修理では、屋根裏内に空気抜きが設けられた。設置個所は垂木面戸（メンド）すなわち軒桁の上部、垂木と垂木の間の隙間で、東西両側各倉毎に２個所、南北両側各２個所、全体で16個所、屋根裏一周ほぼ同じ間隔をおいて空気抜きグリルが取り付けられた。

挿図８　小屋組　組立中

軸部 南倉 解体中　「南倉南西隅ヨリ南倉中倉校木取解北倉小屋取解現況」　（挿図９）

挿図７と同一写真であるが、南倉の校木１本の外された場面を示す。校木には干割れがあるが、軒下のこの辺りでは、角を落とした三角形の断面、そして外側斜面を僅かに決(シャク)って微妙な凹面とした丁寧な仕事ぶりが見られる。なおそのことは外気にあたらなかった場所ではさらに顕著で、中倉内では刃物の跡まで見ることが出来る。またこの写真による限り、校木相互の間に太枘を入れた様子は見えない[7]。隅柱の頭が見えている。校木がすべてもとのもので、もと通り組み上げられたことは言うまでもないが、隅柱、間柱はすべて新材に替えられた。



挿図９　軸部　南倉　解体中

軸部 南倉 組立中　「校木組立方出来新規土居桁置渡現況」　（挿図10）

挿図９と同じく南西隅から、組上げられた南倉軸部を見ている。校木の内側に立てられた新材の隅柱、間柱の上に土居桁が置かれたところ。大梁の先端近くに穴があけられている。木材として筏に組まれた時の名残と言われる。これはこの建物の西側すなわち背後側で、正面からは見えないところ。ボルトを通した校木も、背後側では先端の出が揃っていない。

挿図10　軸部　南倉　組立中

軸部 南倉 解体中　「南側ヨリ南倉入口中倉北倉校木取解中ノ現況」　（挿図11）

手前が南倉、向こうに北倉。ともに階上の校木を取り外しつつある過程で、中倉の板壁は既に取り外されたのであろう、もう見えない。右手前が扉口と、階下からの階段口。その階段は新しく手摺付きのものに替えられた。円柱は四天柱のうちの東側２本が見える。

これは解体中の一段階であるが、これと同じ一段階が組立中にもあって、校倉部分の組立の後を追って中倉の組立にとりかかったであろう。構築の順序が分かる。

挿図11　軸部　南倉　解体中

軸部 南倉 組立中　「土台及柱并入口幣軸廻建方現況」　（挿図12）

地覆を渡し、隅柱、間柱を立て、校木の組み方にかかったところ。手前が南倉で南側の一本目が置かれたばかりである。この間柱は断面長辺９寸、短辺７寸の角材通し柱で、枘孔と思われるものが等間隔にあけられている。校木に関係する工作で、その固定のため雇い枘を入れる枘孔かと思われる。四隅にはこれよりさらに太い９寸角の通し柱が立てられた。これらの柱は庫内では露出して見える。実測図に添柱と書かれるそれらの新材の柱が、校木の歪みを防ぎ、屋根を支える。

階下の床板には、新材でもう１枚直角に重ねて板が張られた。階上の床板は、１重の古材のままである。

中倉の向こうの北倉でも、南倉と符節を合わせて組み立てが始められたところである。

挿図12　軸部　南倉　組立中

軸部 中倉北倉接続部 解体中　「中倉ヨリ北倉ノ南方校木組手中倉羽目板斜面現況」（挿図13）

中倉東側の板壁の取り外しにかかり、間柱上の大斗肘木、北倉の上方の校木３本に接して立てられていた束及び羽目板が外されたところ。なお、後ろ上方に中倉と北倉の屋根裏内間仕切り壁が迫って見える。束の間に落とし込まれていた横羽目板の一部に既に外されたところがあり、手前の束の側面には板決（シャク）りが微かに見える。

束柱 底面 修理中　「大椴木口根元鉛板張方現況」　（挿図14）

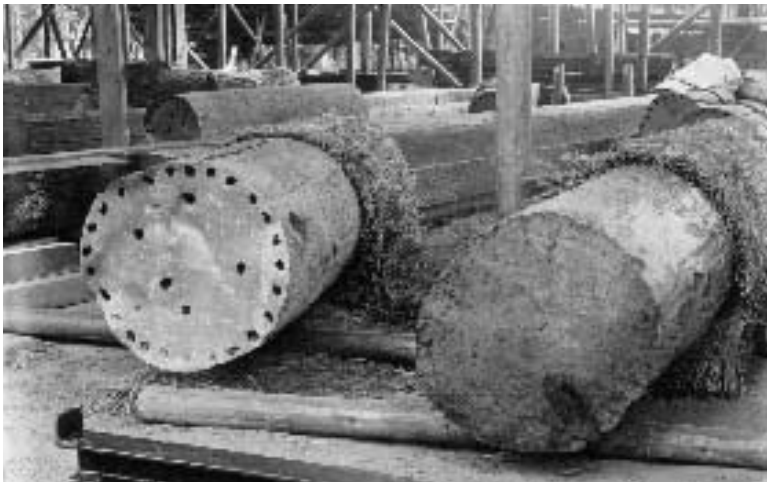
椴（ツカ）は束のこと[8]。横倒しにした束柱の木口に鉛板を張るなど、保護処置を施しているところ。正倉のあらゆる部材の中で最も過酷な条件に曝され続け、これに代わるもののない束柱のこの部分には特に注意が払われたであろう。右の１本では木口の弱った部分を切除し、何かを塗りつけたように見える。左の１本は鉛板を30本近い鋲でとめ、鋲の頭に何かが塗られ、礎石上のもとの位置に立てられるのを待つばかりと見える[9]。後方にも処置の終わった束柱が数本、又その上に渡される土台が置かれている。鉛板は40本の束柱すべてに取り付けられた。

鉛板をこのような部分に張りつけたのは、白蟻防除が目的であったと言われる。ここで或る種の金属による保存上の効果として思い当たるのは、銅の特性についてである。この正倉には土台の長く突き出た先に被せられた銅板など、所々にある。多くが元禄６年（1693）修理の時の付加物である。それと同時期に補強の目的で束柱に巻かれた鉄の輪があるが、それらはすべて腐食し切っている。それに比べて、銅は少なくとも外見上はなお健全と見え、しかも近接する木材をはじめ、雨水の介在によるものか、床下のコンクリートの表面にまで銅による影響かと思われる現象が見られる。

以上、正倉の現在の実状を理解するために、既に過去のものとなったもとの構造とも比較しつつ、主に外からは見難い部分に注目した。大正２年の解体修理に際して小屋組の変えられたことが惜しまれるが、今振り返って強く印象づけられたのは、正倉の構造強化の確実さである。

挿図13　軸部　中倉北倉接続部　解体中

そこで、正倉の中倉にある修理銘の棟札に注目すると、冒頭、宝物献納の由来に始まり、続いて次の如く記されている。



挿図14　束柱　底面　修理中

「此宝庫為其収蔵之處距今実千百五十八年矣歳月之久時有破損從而修理之不止于一再及近時破損漸大屋宇傾斜不能無萬一之虞」（挿図15）

解体前の写真によっても正倉の傷み具合を推測し得るが、宝物にまで累の及び兼ねない程の深刻さが「萬一之虞」の四文字に込められている。次いで勅裁を仰いだ上、仮庫を建てて宝物を移し、解体に取りかかられた。修理に当たっては腐朽した木材を新材に替え、構造の歪みを匡正はするが、旧材で使用に耐えるものはすべて生かして旧態を変えず、堅牢を期すことを以て修理の大綱とされた。ただ当時の考え方から旧態が外観のことに限られ、直前まで維持されて来た古式の屋根構造を古材とともに廃し、大半を新材による西洋式に変えてしまったことが惜しまれる。

大正２年の修理によって構造を強化された正倉は、翌３年仮庫に未整理の宝物を残したほかすべてをもとに戻し、昭和に入りその20年前後、戦時疎開の一時期を除き、同35年５月まで実質上の宝庫であり続けた。人の手の及ばぬ安全空間の確保という保存の第一条件を満たし得たのは、独り正倉だけであった。その正倉は今、専らそれ自身が護られるべき国宝建築として我々の前にある。その実態の理解に寄与することが、まことに細かな本稿の願いであるが、この際望ましいのは、あの解体大修理の仕様の明らかにされること、そして建築をはじめ関連する領域の学術調査によって正倉の実体の正しい理解に一歩でも近づくことである。

挿図15　修理銘棟札

註５　書陵部紀要　第７号　正倉院特集　昭和31年

註６　この時期、正倉近くの避雷針は東側に２本、西側に１本であった。後に西にもう１本増やされたが、昭和61年に４本とも撤去し、棟上導体に代えられた。導体は平角銅線で、棟上に１条、軒先一周に１条を回し、背後に引き下ろされている。

註７　後藤治「正倉院正倉の建築構法」（『仏教芸術』237号　平成10年）で、同時代の校倉校木相互間の太枘が説明されている。

註８　「椏」の読みはツカと推測した。これについては中村達太郎著『日本建築辞彙』明治39年にその通り説明あることを中村昌生氏から教示を受けた。即ち「つか（束）短キ柱ヲイフ。故ニ便宜上「椏」字ヲ用フルコトアリ」とある。

註９　束柱底裏の鉛板については、和田軍一「正倉院夜話」（註２前掲）中「三ッ倉」の項に解説がある。ただそこでは鉛板は大正２年解体時既に張られてあったと説かれるなど、検討を要する問題が提示されたまま残るが、今は鉛板に言及された事実のみ記すに止める。

（元 正倉院事務所長）